

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 東京天文台のロンビックアンテナについて

昔、むかし、東京天文台構内にロンビックアンテナという世界の国々が発信する報時信号を受信するアンテナがあり、高さ20mほどの4本の鉄塔が立っていた。その配置は図1、図2のようであった。この図は東京天文台年次報告1965年版に掲載されたものである。当時北研究棟と管理棟は建設されたばかりであり、現在の自動光電子午環（PMC）辺りは電波グループの拠点であった。10mパラボラ太陽電波望遠鏡とか、24m固定式球面電波望遠鏡などが配置されている。この図では官舎は全て描かれている。この時点では事務部は14号官舎で仕事をしていた。当然ながらまだ太陽フレア望遠鏡も気球望遠鏡実験室もない。

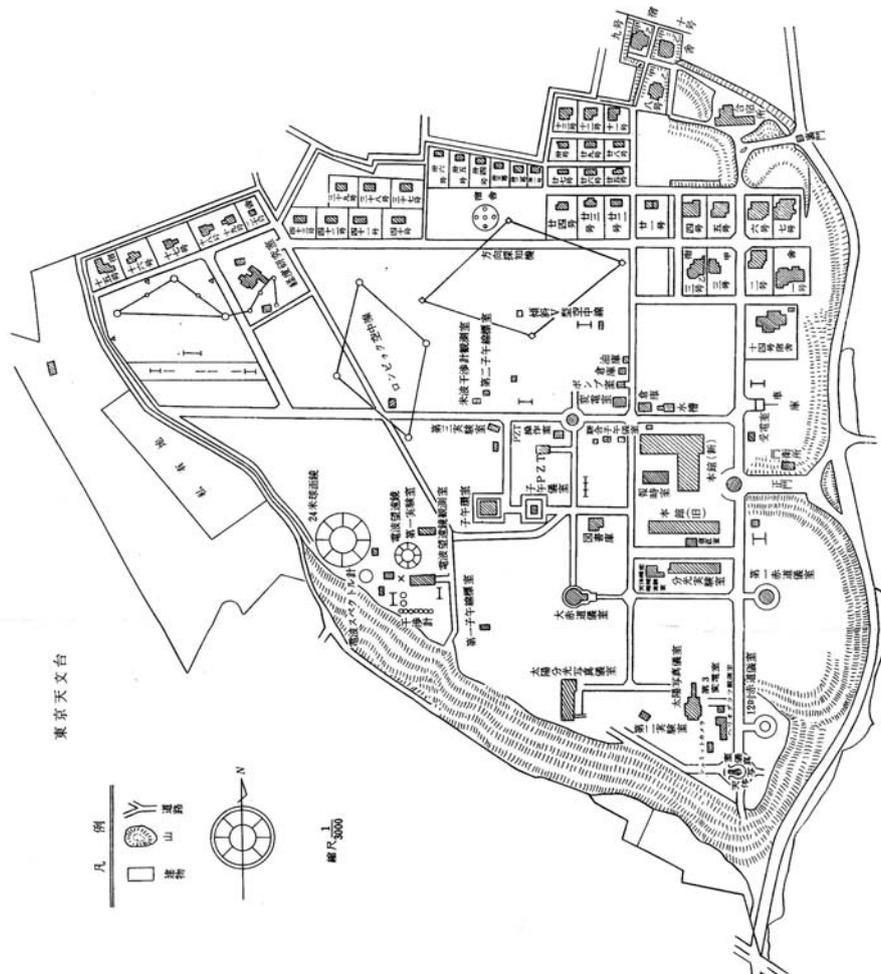


図1 1965年度の年次報告に掲載された天文台建物配置図

このアンテナの鉄塔の内3本はずっと昔に撤去された。原子時計ができ、時計の精度が上り、各国の時計との比較の必要がなくなったためだと思う。このアンテナの西端のアンテナが1986年頃、「すばる」建設の実験として接地乱流層の測定に使われたことをアーカ

イブ室新聞 72 号に書いた。



図2 ロンビックアンテナ部の拡大図



写真1 朝焼けのアンテナ



写真2 上って作業する筆者

そしてなぜか4本のアンテナ鉄塔の内、1本(写真3)だけPMCの北側に壊されなくて立っている。

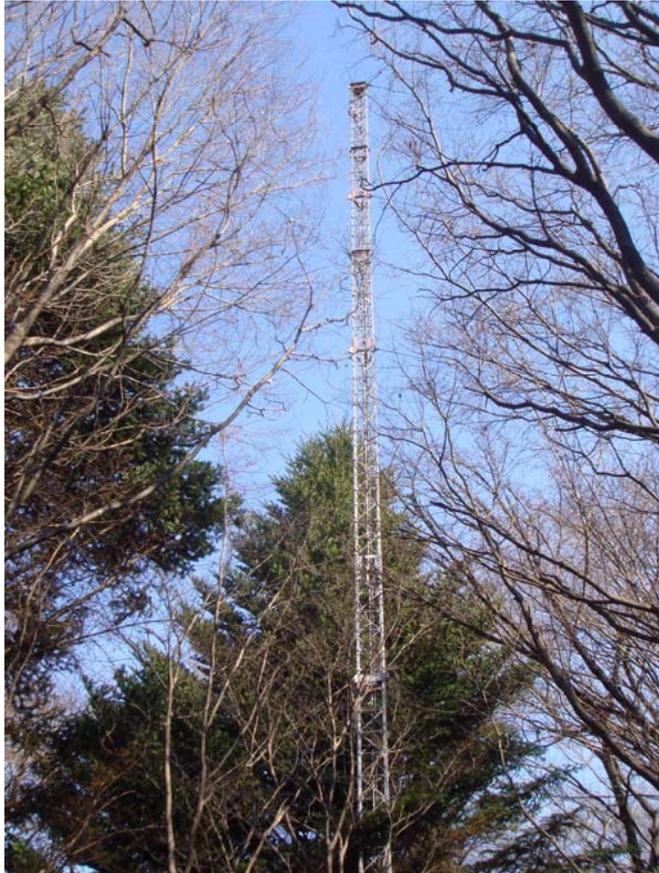


写真3 2009年の今日、1本だけ残っているアンテナ

そして、このアンテナに貼られていたケーブルの残骸が木の枝、大地に転がっているのである(写真4)。



写真4 ロンビックアンテナの残骸

アーカイブ室新聞 112号にこの残骸を使って「つるべ拾い用イカリ」を製作した記事を書いた。次号では、写真4に見られる碍子について書きたい。この碍子は数十年の間風雨に晒され、大地に放置されたにも拘らず、その美しい姿、機能を保っているように見える。